

# 脱・1人1票

【これが多数派診断法（集計例）】  
 ■例えば「非常によい」=8%、よい=23%、まずまず=27%、容認=12%、不十分=19%、失格=11%の投票結果だった候補者の場合→上位から順番に割合を足していくと「まずまず」のところで半数を超える。従って、この候補者は「まずまず」と評価される  
 ■同じ評価の候補者が2人以上いた場合、評価結果より良い評価と悪い評価の割合を比較し、良い評価が多ければ「+」、悪い評価が多ければ「-」。上記の列で見ると、「まずまず」より良い評価は計31%、悪い評価は計42%となるため、評価結果は「まずまず（-）」となる

## 仏大統領選で実験

### 全候補者6段階評価 ヒントはワイン

1人1票。民主主義の基本と考えられてきたこの常識を覆す新たな投票方法の実験が、フランス大統領選を舞台に試みられた。仏理工科学校の数学者がパリ郊外の自治体の協力を得て実施した「多数派診断法」。候補者全員を6段階で評価し、その総体で当選者を決める手法だ。実際に選挙で採用されるにはまだ課題は多いが、取り組みの背景にある「現在の選挙制度が民意を反映していないのでは」との問いかけは重い。

（パリ＝国末恵人）

現実の投票結果			実験投票の結果		
順位	名前(所属・傾向)	得票率(%)	順位	名前	評価結果
1	ロワイヤル(社会党)	29.9	1	バイル	まずまず(+)
2	サルコジ(右派)	29.0	2	ロワイヤル	まずまず(-)
3	バイル(中道)	25.5	3	サルコジ	まずまず(-)
4	ルペン(右翼)	5.9	4	ポワネ	容認(-)
5	フザンスノ(トロツキスト)	2.5	5	フザンスノ	不十分(+)
6	ドビリエ(右翼)	1.9	6	ビュフェ	不十分(+)
7	ポワネ(緑の党)	1.7	7	ポベ	不十分(-)
8	ビュフェ(共産党)	1.4	8	ラギエ	不十分(-)
9	ポベ(反グローバリ化)	0.9	9	ニウー	失格
10	ラギエ(トロツキスト)	0.8	10	ドビリエ	失格
11	ニウー(右派)	0.3	11	シバルディ	失格
12	シバルディ(トロツキスト)	0.2	12	ルペン	失格



バイル 元教育相



ロワイヤル 元環境相



サルコジ大統領

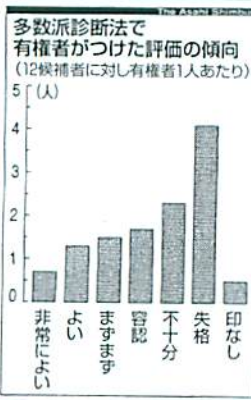


ルペン 国民戦線党首

結果はどうか。オルセ市はインターネットが比較的多く住む、やや左派が強い街だ。3投票所の実験の選挙では、社会党のロワイヤル氏が僅差でトップ。ところが、多数派診断法だと中道のバイル氏が首位になった。バイル氏は固有支持層

### 1位バイル氏、ルペン氏最下位

が薄く、世論調査では「一決選に出たら当選する」と見られていた。同氏に対する有権者の嫌悪感の薄さが有利に働き、結果に出た形だ。現実の選挙では同氏が第1回投票で3位にとどまり、決選に進出できなかった。



もう一つの注目すべき結果は、現実の投票で4位になった右翼ルペン氏が、実験では最下位だった。

仏大統領選の第1回投票があった4月22日、パリ南郊オルセ市の3投票所の有権者は2種類の投票に臨んだ。まず最初は他の都市と同様に、当選させた1人を12人の候補者から選ぶ正規の投票。それを終えた有権者は、見慣れない投票用紙を隣で手渡された。用紙には候補者全員の名前と、6種類の評価を記す欄。各候補者について、学校の通信簿のような「非常によい」「よい」「まずまず」「容認」「不十分」「失格」の評価をし、用紙を実験用投票箱に入れる。集計の際は、各候補者の評価の中央値を比較する。集計例。これが「多数派診断法」だ。実験は、仏エリート養成校「理工科学校のミネル・パランスキー特任教授(効率論とリタ・ラキ教授(ゲーム理論))が、オルセ市のマリーエレーヌ・オプリ市長(49)の協力を得て実施。事前の有権者に呼びかけ、投票者の74%にあたる1752人が協力した。きっかけは前年02年の仏大統領選の経験だ。左派候補のジョスバン元首相が第1回投票で排除され、右翼候補のルペン氏が決選投票に進出。左派支持者の多くが意思を反し、決選投票で右派のシラク前大統領に投票せざるを得なくなった。それを目にしたパランスキー特任教授らが、世論を正確に反映する投票方法を模索。ヒントはポルドー・ワインの格付け方法だった。ワインの味への意見は試飲者によってまちまちで、まとまりにくい。多様な意見をどう集計するかをワインの専門家とも検討し、方法を編み出したという。

「オルセ市のマリーエレーヌ・オプリ市長(49)の協力を得て実施。事前の有権者に呼びかけ、投票者の74%にあたる1752人が協力した。きっかけは前年02年の仏大統領選の経験だ。左派候補のジョスバン元首相が第1回投票で排除され、右翼候補のルペン氏が決選投票に進出。左派支持者の多くが意思を反し、決選投票で右派のシラク前大統領に投票せざるを得なくなった。それを目にしたパランスキー特任教授らが、世論を正確に反映する投票方法を模索。ヒントはポルドー・ワインの格付け方法だった。ワインの味への意見は試飲者によってまちまちで、まとまりにくい。多様な意見をどう集計するかをワインの専門家とも検討し、方法を編み出したという。」

### 民意反映しているか 議論が大事

全候補者を個別に評価する投票方法は、世界でも実施されたことがほとんどないだろう。投票方法の歴史に詳しい田村理・専修大教授(憲法)によると、仏の投票・選挙制度が、第1回投票と決選投票を戦う2回投票制や、時に3回投票制も採用してきたのは、有権者の「意思の集約」(多数派形成)を優先したからだ。「その結果、有権者は第1回投票後に見解の変更を迫られ、

本来の政治的意思を反映させられないケースも生じた。今回の実験は『意思の集約』より「多様な意思表示」を重視するもので、実現すれば伝統の大転換となる」と田村教授は語る。もちろん、実現への道は遠い。「現制度をあえて変更するだけの強い不満が、社会で共有されているとは思えない」との声もある。重要なのは、民主主義の根幹である選挙制度の改善に向けた模索が始まっている点だ。今回の仏大統領選ではこれ以外に、候補者を3段階評価する投票方法を、北西部カーン大学の研究者らが実験した。効率の悪さなどから時に批判にさらされる民主主義を維持し、磨いていくには、より優れた制度構築をめざす模索と実験が欠かせない。仏では、02年の右翼の決選進出という政治危機によってその必要性が認識された。翻って、日本ではどうか。日本の制度は民意を十分反映しているか。こうした問いかけが、政治危機を迎える前にもっと盛んになってほしいと思う。(国末)

### 読むナビ

たことだ。「ルペンだけはいやだ」と考える有権者が多かったことを意味している。全般的傾向として、有権者がつけた評価では「失格」が最も多く、好意的な評価ほど数が減っている。グラフ。「非常によい」との評価を用いた有権者はほぼ2人に1人だった。有効だった計1733票のうち、評価の仕方は

実際に1705通りに分かれた。すべての候補者に「失格」をつけた人もいれば、右派と共産党の候補を「よい」と判断した人も。

パランスキー特任教授は「有権者の意見がいかに多様かを示している。1人ずつすべて異なる政治的意見を、この方法で投票に反映することができ」と説明する。

Asahi (journal), Tokyo 12 juin 2007  
 Jugement majoritaire